

セクシュアル・マイノリティのジェンダー・アイデンティティに関する試論

京都大学教育学研究科

博士後期課程 2 回生 大 澤 尚 也

A Preliminary Study on Gender Identity of Sexual Minority

OSAWA, Naoya

キーワード：セクシュアル・マイノリティ、ジェンダー・アイデンティティ、自己イメージ

Key words: Sexual Minority, Gender Identity, Self Image

1. はじめに

個人の「性」を考える上で、セックス、セクシュアリティ、ジェンダーという 3 つの概念が区別される。一般的にセックスは性染色体や内外性器で識別される生物学的・解剖学的な性差・性別、セクシュアリティは性的欲望・性行動の総体、ジェンダーは社会的・文化的な性差・性別と定義される (播磨, 2006; 小倉, 2001)。

個人の性にまつわるジェンダーはさらに、性役割とジェンダー・アイデンティティの 2 つに区分される。性役割 (ジェンダー・ロール) とは社会的・文化的レベルでの性別に基づく、男性性(いわゆる「男らしさ」)、女性性 (いわゆる「女性らしさ」) として求められるような態度や行動のことをいう。それに対して、一般的にジェンダー・アイデンティティとは、“自分は女 (男) である”、“自分は男性でも女性でもない”といった自己の性別認知であるとされ、性同一性や性自認などと訳されることもある。また、個人が性的魅力を感じる対象は性指向と呼ばれ、多くの場合、ジェンダーとは区別される。

一般社会で多数を占めるマジョリティは男性か女性の身体を持ち、出生時に指定された性別と経験する性別が一致しているシスジェンダーであり、異性愛者である。セクシュアル・マイノリティとは、性に関する領域で「数または力の少ないグループ」(石丸, 2001) に属する人々である。そこには、男女両方の身体的特徴を持つインターセックス (間性、半陰陽) や、性指向が異性愛ではないレズビアン・ゲイ (同性愛者) やバイセクシュアル (両性愛者)、出生時に指定された性別と異なる性別認知をするトランスジェンダー、また女性化・男性化を促す医学的介入によって一次性徴や二次性徴を変えることを希望する (あるいは既に変えた) トランスセクシュアルといった人々が含まれる。

ジェンダー・アイデンティティは一般に“私は女(男)である”あるいは“女でも男でもない”という自己認知とされると先に述べたが、セクシュアル・マイノリティのジェンダー・アイデンティティを考える上

では、以下の2つの理由から、この単純な捉え方は十分でないように思われる。第一に、セクシュアル・マイノリティに属する多くの人が抱く、自身の性役割への志向性や自己イメージにまつわる苦悩を、その定義からは拾いきれないからである。すなわち、“自己の性別認知”という定義では、一見、自己のジェンダーについて苦悩するのはトランスジェンダーやトランスセクシュアルのみであり、シスジェンダーのレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルはジェンダー・アイデンティティに悩まないような印象を与えうる。しかし臨床研究においては、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの当事者が、性指向だけでなくジェンダーに関しても深刻に悩みうると指摘される (Dresher, 1995; 及川, 2016)。Dresher(1998)は、一般文化では性指向と性の所属意識とが混同されるために、「同性への関心という感情は、育ちつつあるジェンダー感覚との葛藤が生じることがある」と述べている。このようにして、同性愛的関心は、当人の“女であるか男であるか”という所属意識にも重要な影響を及ぼすと考えられる。あるいは同性愛的関心に気づくことで、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの人々も、トランスジェンダーとは異なるニュアンスで、典型的な(マジョリティ的な)女あるいは男に自分は属さないという認識をしているかもしれない。

第二に、女性か男性かそれ以外か、という捉え方はどこか静的で不変的な印象を抱かせるが、セクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・アイデンティティが動的で可変的な性質を帯びやすいことも理由に挙げられる。社会心理学の調査研究によると、セクシュアル・マイノリティ当事者は、「男女のどちらでもない」というアイデンティティを形成する際に、トランスジェンダーやゲイといったセクシュアル・マイノリティのあるカテゴリーに同一化するだけでなく、そのカテゴリーの典型にあてはまらないことにこそ、アイデンティティを見出している (草柳, 2000; Jowett, 2010; 石井, 2012)。

セクシュアル・マイノリティのジェンダー・アイデンティティを捉えるためには、どのような定義、理論的枠組みが必要だろうか。ジェンダー・アイデンティティという用語は、その誕生以後、生物学、医学、心理学、哲学、ジェンダー学などといった広範な領域で様々に議論されてきた。それゆえ、それぞれの学問領域で共通理解が得られないことも指摘されるほど (中村, 2006; 佐々木・尾崎, 2007)、ジェンダー・アイデンティティという用語が内包しうる意味内容は多様である。セクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・アイデンティティを捉える枠組みを考えるためには、まず、ジェンダー・アイデンティティが各学問領域でどのように捉えられてきたのかという意味内容の整理が必要だろう。また、セクシュアル・マイノリティの自己イメージにおいて重視される点も検討せねばならないだろう。本論文では、まず、ジェンダー・アイデンティティという用語が生まれた経緯と、その定義に関する研究を概観し、特に近年その動的なプロセスに焦点が当てられていることを確認する。そして、セクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージに関する研究から、セクシュアル・マイノリティが自己イメージを語るうえでは、社会規範とのズレが重要視されることを明らかにする。以上を踏まえて、セクシュアル・マイノリティのジェンダー・アイデンティティを捉える上で必要な理論的枠組みを模索することが本論文の目的である。

2. ジェンダー・アイデンティティ概念の誕生とジェンダー学・生物学・医学領域における発展

20 世紀前半までジェンダーという用語は今日用いられるような意味で用いられることはなかった

(Ehrhardt, 1985)。20 世紀初頭に Freud が提唱した精神分析理論は、男性性・女性性の分化発達について理論的枠組みを与えているが、セックスとジェンダーの区別のような、性の多様性についてはあまり念頭に置かれておらず、その理論も、実証的な観察研究などを通して修正を余儀なくされた (小此木・及川, 1981)。

ジェンダーおよびジェンダー・アイデンティティの研究は、1950 年代に、John Money と Robert Stoller という二人の研究者の登場により導かれ発展してきた (小此木・及川, 1981)。ジェンダーという用語を初めて用いたのは、小児心理内分泌学の開拓者である Money とされる。Money, Hampson & Hampson (1955) は半陰陽(Hermaphrodites)に関する一連の臨床研究を通して、セックスとジェンダーを切り離して考えることを提唱した。内部性器や外部性器の形成不全を伴って誕生した半陰陽の患者たちの心理的・性的発達に関する研究を通して、身体的な性別であるセックスと心理的な性別としてのジェンダーとが独立していることを明らかにしたのである (福富, 2006)。

Money と同時期に、精神分析医である Stoller もまた半陰陽の研究を行った。Stoller は、恩師でありスーパーバイザーである Greens との共同研究で、ジェンダー・アイデンティティの着想を得、1963 年の国際精神分析学会第 23 回総会の席上で、ジェンダー・アイデンティティという用語および概念を初めて公にした(小此木・及川, 1981)。翌年にその講演の内容を掲載した論文にて、Stoller (1964) は「ジェンダー・アイデンティティとは、自分がどの性別に属すると思っているかという感覚、すなわち、“私は男だ”あるいは“私は女だ”という認識である」と定義している。

Stoller (1964) は、外性器から指定された女性としての性役割にはそぐわない行動を示し、思春期以降に性染色体上は男性と同じあることが判明した症例報告を基にジェンダー・アイデンティティについての理論的仮説を提出した。その症例で、性染色体に関する事実を告げられる際に、患者が「あたかもうつすらと気づいており、確信をもっていたことを改めて告げられた」ようであり、それ以後、不自由なく男の子として自然に振る舞っていたことを論拠として、Stoller (1964) は、ジェンダー・アイデンティティの核となる、中核的ジェンダー・アイデンティティ (core gender identity: 生涯変わりえない、自身の性別に関する感覚) があると仮定している。ジェンダー・アイデンティティと中核的ジェンダー・アイデンティティの関係について、Stoller (1968) は、「ジェンダー・アイデンティティの発達過程は、少なくとも青年期が終了するまでは進行していくものだろう。しかし、それとは逆に中核的ジェンダー・アイデンティティは子どもの発達で男根期に達してしまう前に、すでに確立されているのである」と述べている。今日でいうジェンダー・アイデンティティ、あるいは一般的に「心の性」として想定されるような不変的な自己の性別認知を中核的ジェンダー・アイデンティティという概念で説明し、より広範な、個人のジェンダーに関するアイデンティティをジェンダー・アイデンティティと概念化したと考えられる。

わが国でも、Money と Stoller の研究を受け、精神分析学の立場から、小此木・及川 (1981) がジェンダー・アイデンティティについての理論の整理を行った。小此木・及川(1981)は、ジェンダー・アイデンティティ (引用文中は性別同一性) について、「性別同一性は、個人が自分の性別・性差 (男性-女性 male-female、男であること-女であること maleness-femaleness、男らしさ-女らしさ masculine-feminine) について抱く、全ての感覚、認知、空想、心象、そして実際の言動、さらには文化的・社会的価値観や

規範までをも、そのうちに含み成り立っている。つまり性別同一性とは、その個人があらゆる行動をとおして得られた体験と、そこから生まれた自己認識の統合の所産ともいえよう」と定義している。「体験と、(中略) 自己認識の統合の所産」と述べていることから推測するに、小此木・及川 (1981) にとってのジェンダー・アイデンティティは、個人の言動の内的・外的な統一性を目指す心的な働きを前提とした、可変的なものである。

小此木・及川 (1981) は、ジェンダー・アイデンティティの 3 つの構成要素 (①中核的ジェンダー・アイデンティティ、②性役割、③性対象選択) の検討を通して、この可変性についてより詳細に説明している。中核的ジェンダー・アイデンティティは、生後 18 か月ごろに形成され、生涯変化しえない自己認知・確信である。それに対して、女性役割-男性役割を引き受け、習得し、実行していく能力である性役割や、思春期・青年期の第二性徴による身体像の変化と親密な他者と全人格的な接触をもてる能力を反映する性対象選択 *sexual partner orientation*¹ は、機能性・可塑性を持っているとされる。自分が“女であるか男であるか”の確信は生涯変わらないのに対して、“女であること”・“男であること”にまつわる思いや“女性的か”・“男性的か”といった自己イメージは、習得した社会規範やボディイメージ、親密な関係を結ぶ能力等の「統合の所産」として、更新され続ける動的なものである。小此木・及川 (1981) は、変化しえない確信と、変化しうる自己イメージとを統合したパーソナリティの構造としてジェンダー・アイデンティティを構想しているといえる。

その後、ジェンダー・アイデンティティの研究は、生物学・精神医学の領域だけでなく、フェミニズムの流れを汲んだ女性学やジェンダー学においても盛んになされた。それらの研究は主として、文化社会的に抑圧されてきた女性を解放するという動きから、主に対象を女性一般とし、ジェンダー・アイデンティティを“性役割に対する志向性”として捉えてきた (佐々木・尾崎, 2007)。すなわち、BSRI (Bem, 1974) や PSQ (Spence, Helmreich & Stapp, 1975) といった形容語による性役割尺度で、女性性(男性性)得点が高ければ女性(男性)アイデンティティが高いとみなしたり (e.g. 東, 2002; O'Heron & Orlofsky, 1990)、あるいは具体的な性役割への一致度の評定でジェンダー・アイデンティティを測定したりしてきた (e.g. Drass, 1986; 石田, 1994)。これらの研究においては、女性性あるいは男性性への志向性という、性役割のみがジェンダー・アイデンティティとみなされている。

他に、特定の性に関する同一性の感覚を、ジェンダー・アイデンティティとして測定しようとした研究も見られる (青木, 1991; 土肥, 1999; 伊藤, 2001)。例えば土肥 (1999) はジェンダー・アイデンティティを「自己の性 (sex) を容認した上で成り立つ自我アイデンティティ」と捉え、エリクソンのライフサイクル論を参考に①性の受容、②異性との親密性、③父母との同一化の 3 つの下位尺度からなるジェンダー・アイデンティティ尺度を開発している。その項目を見ると「私はよく一対一のデートをしている」、

¹小此木・及川 (1981) によるジェンダー・アイデンティティは、性対象選択を構成要素の 1 つとして想定していることから、性指向を構成要素に含むと批判されることがある (e.g. 佐々木・尾崎, 2007)。確かに「異性」という言葉が定義に含まれ異性愛主義的なニュアンスを感じるが、この概念の本質はそこにはないだろう。小此木・及川 (1981) は、性対象選択を「単にそれは異性を性的衝動のはけ口として、また欲望充足の道具として選択するのではなく、より広く社会的対人交流の中で、異性と全人格的な接触をもてる能力を意味する」と定義している。欲求充足ではなく親密な関係を築く能力を強調している点から推測するに、性対象選択は、性指向の如何に関わらず、相手を尊重した適切な性愛関係を結ぶ能力を重視した概念だと考えられる。

「恋愛することは人生で大切なことだ」といった恋愛関係や、「ひげがはえるのは、男として恥ずかしいことではない」、「女ならではの、の人生の楽しみを見つけない」といったセックスの受容に焦点を当てている。小此木・及川 (1981) の枠組みに沿うならば、性対象選択に関するジェンダー・アイデンティティに重きを置いた研究であると考えられる。

他方で、生物学・医学の臨床研究の領域では、非典型的な性心理発達をする人々を対象に、どの性別で生きていくかという所属意識の決定要因を求める研究が盛んにおこなわれた (中村, 2006)。Swaab (2004) は、ジェンダー・アイデンティティを「解剖学的性と独立な、男性的であるか女性的であるかの“所属意識 belongingness”という観点から表現されるアイデンティティの体験」と定義し、ステロイド合成因子、双子、刷り込み、ホルモン、インターセックスなどの様々な先行研究から、ジェンダー・アイデンティティおよび性指向の決定要因に関するレビューを行い、胎児期のホルモンがジェンダー・アイデンティティに重要な関与をしている可能性を示唆した。Swaab (2004) が“所属意識”と言及しているように、生物学・医学領域では、性別違和(性同一性障害)の発生率や出生時に指定された性別と一致した性別で生きるか否かを指標として、ジェンダー・アイデンティティを捉えている。すなわち、生物学・医学領域では、社会的に規定される女/男いずれかの性別に所属することへの違和感の有無や、女/男いずれの性別に所属しているかという、ある種の意思決定をジェンダー・アイデンティティとみなしていると指摘しうる。

佐々木・尾崎 (2007) が開発したジェンダー・アイデンティティ尺度は、所属意識という観点からジェンダー・アイデンティティを捉えたものと考えられる。佐々木・尾崎 (2007) は、ジェンダー・アイデンティティを「ある性別に対するアイデンティティ感覚」と捉え、谷 (2001) によるエリクソンのアイデンティティ論理解を参考に、①展望的性同一性、②社会現実的性同一性、③自己一貫的性同一性、④他者一致的性同一性の4つの下位尺度からなるジェンダー・アイデンティティ尺度を開発した。「現実の社会の中で、女性(男性)として自分らしい生活が送れる自信がある」、「人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする(逆転項目)」といった項目に代表されるように、佐々木・尾崎 (2007) は、ある性別として生きていくことに対する意思、あるいはある性別へ所属することへの違和感のなさをジェンダー・アイデンティティとして捉えているといえる。

以上をまとめると、ジェンダー心理学においては、主に女性 (の性役割) を対象に、小此木・及川 (1981) が可塑性を持ち歴史的・社会的に修正を受け続けるとした性役割、性対象選択に焦点を当ててジェンダー・アイデンティティという用語を捉えた研究が行われてきた。それに対して生物学・医学では、中核的ジェンダー・アイデンティティや性役割、性対象選択を背景として決定される個人の所属意識がジェンダー・アイデンティティとして捉えられてきた。こうした学問領域間でのジェンダー・アイデンティティの捉え方の違いは、十数年前から指摘され、ジェンダー・アイデンティティの共通理解を目指した研究も見られるようになる (中村, 2006; 佐々木・尾崎, 2007)。中村 (2006) は、領域間にジェンダー・アイデンティティとは何かの共通認識がないという問題意識から、ジェンダーに関する双方の前提的な認識の違い、およびジェンダー・アイデンティティの概念的定義に関するレビューを行った。そして両者の批判的検討をもとに、ジェンダー・アイデンティティを「身体のような特徴 (外見的特徴だけでなく、胎児期での脳への作用や生理や妊娠などによる体験的特徴も含む) が、個々の文

化・社会生活を通じて自己のアイデンティティ形成とどのように関わるかということについて得た、きわめて個人的で主観的な解釈であり、更新し続けられるプロセスである」と定義している。身体的特徴とアイデンティティとの関連に関する解釈、すなわち所属意識を重視している点では生物学・医学領域と同様の系譜に位置づけられるものだろうが、「更新し続けられるプロセス」と明言しているように、中村 (2006) はジェンダー・アイデンティティが流動的な性質を持ったものとして考えている。様々な要素の統合的な解釈と定義することで、小此木・及川 (1981) のような、力動的なプロセスの結果として生まれるものとしてジェンダー・アイデンティティを捉える視点を再評価したものといえる。

以上のように、ジェンダー・アイデンティティという用語は、広く性や性別に関わる自己イメージという点は共通しているが、セックス、ジェンダー、セクシュアリティのいずれに重点を置くか、また構成要素と所属意識のいずれを重視するかといった点で、領域間、研究者間にはかなりの差異がある。すなわち、ジェンダー・アイデンティティという言葉で意味される内容は、自己の性についての確信 (中核的ジェンダー・アイデンティティ) である場合もあれば、男性性-女性性への志向性 (性役割に関する自己イメージ) である場合もあり、あるいは自身の身体的性の受容の程度である場合もある。ジェンダー・アイデンティティという用語の定義は、現段階では統一されていないのが実情といえる。しかし、ジェンダー・アイデンティティの共通理解に与しようとする研究もいくつか見られ、そこでは様々な要素の統合の所産であり、固定化されるものではなく更新され続けるプロセスであるという、動的な視点が重視されている。

3. セクシュアル・マイノリティの自己イメージ

さて、セクシュアル・マイノリティのジェンダー・アイデンティティ形成ではどのようなことが重視されているのだろうか。あるいはセクシュアル・マイノリティのアイデンティティを捉えるには、どのような点に注目する必要があるだろうか。この点について検討するために、本節ではセクシュアル・マイノリティの自己イメージに関する質的研究を概観する。

セクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージに関する研究として代表的なものは、同性愛アイデンティティ形成に関する研究である (e.g. Cass, 1984; Troiden, 1988)。同性愛アイデンティティ形成の理論モデルは、研究者によって大まかに違いはあるものの、その特徴は凡そ一致しており、他のマイノリティ・グループのアイデンティティ形成とも類似する点が多い (石丸, 2001)。例えば Cass (1984) は、同性愛アイデンティティが形成されるモデルを提唱し、その妥当性を検討している。このモデルは、①アイデンティティの混乱 (自分の同性愛的な関心や行動に気づき、混乱する段階)、②アイデンティティの比較 (同性愛者である可能性を認めたとうえで、自己と非同性愛者との違いが明らかになっていく段階)、③アイデンティティへの寛容化 (同性愛者たる自己イメージを認め、社会的・性的・情動的な必要性から同性愛コミュニティを探索する段階)、④アイデンティティの受容 (同性愛に対して肯定的になる段階)、⑤アイデンティティへの誇り (自身の同性愛アイデンティティに対し誇りと満足を感じる段階)、⑥アイデンティティの統合 (同性愛であることが自分のアイデンティティの一部として統合される段階) の6段階からなる。セクシュアル・マイノリティとしてのアイデンティティの研究は、ゲイ男性の研究から始まったが、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーなど他のセクシュアル・マイノリティ

のアイデンティティについて根幹においては一致しているため、LGBTQ²アイデンティティの形成と一括して称されることもある (e.g. Eliason & Schope, 2007)。

セクシュアル・マイノリティとしてのアイデンティティ形成のモデルは、現在においてもその臨床的な有用性が指摘される (及川, 2016)。というのも、このモデルが、セクシュアル・マイノリティが、自身の性質に気付き、それまで築いてきたマジョリティ的な生き方との間で引き起こされる葛藤や性指向をもった自身がいかに生きていくか、という実存的な苦悩を理解する上で重要な指針となるからだろう。その意味で、セクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージを考える上では、トランスジェンダーやレズビアンといった集団への所属意識が重要であると考えられる。

他方で、セクシュアル・マイノリティ当事者を対象に行われた質的研究においても、確かに、セクシュアル・マイノリティ当事者はマジョリティとのセクシュアリティの差異の認識を通じて同性愛者としての自己を位置づけることが指摘される (Connell, 1992)。しかし、これらの研究では、セクシュアル・マイノリティ当事者が、同性愛者としてのアイデンティティや、トランスセクシュアルというカテゴリーへのアイデンティティよりも、むしろそれらのカテゴリーからのズレを自己イメージの重要な側面として捉えていることが指摘されてきた (Connell, 1992; 石井, 2012; 草柳, 2000; Jowett, 2010)。

石井 (2012) は、トランスジェンダー・トランスセクシュアルの当事者を対象にインタビュー調査を行い、彼らの自己イメージが、『男』や『女』、『性同一性障害』というカテゴリーとの差異を含むものとして表現されている」ことを示している。即ち、石井 (2012) は、「既存のカテゴリーと同一化しようとする時期における、そのカテゴリーと自己とのずれの感覚が共通して語られた」ことを指摘する。既存のカテゴリーとのズレの中に自己イメージが形成されるにあたっては、まず既存のイメージ、すなわち「性同一性障害者らしく」、「男らしく」といったようにカテゴリーを意識して同一化しようとする時期があるが、その時期においてもそのカテゴリーと自己とのズレの感覚が意識される。ただしそのカテゴリーとのズレの感覚は何にも自分が所属しないという不安も喚起するものであり、そのズレを許容することも困難な課題となりうる。石井 (2012) は当事者が自身の“ズレ”を許容する過程について、「さまざまな当事者たちとの出会いにおいて、話を聞いたり、情報を集めたりしていくうちに、かれらは期待される典型的な当事者像とは合致しない自己のあり方を受容するようになる」といい、さらに、「当事者団体との出会いによって、促進されたのは、むしろ、カテゴリーとのズレのなかにより自分らしい姿を模索することであった」と述べている。つまり、当事者との出会いを通じてカテゴリーとのズレを許容するだけでなく、そのズレの中にこそ、自己イメージの重要な側面を見出すようになるのである。石井 (2012) が当事者へのインタビューの分析にあたって、「ずれの中に見出される自己像が、当事者たちに肯定的なものとして捉えられている」、「当事者たちに見られたのは、カテゴリーへ同化するのではなく、そこからのずれを有する自己イメージを積極的に作り上げている様子である」と、繰り返し指摘してい

² LGBT とはレズビアン(Lesbian)、ゲイ(Gay)、バイセクシュアル(Bisexual)、トランスジェンダー(Transgender)の人々を指し、各々の頭文字を取った略称である。LGBT は一般にセクシュアル・マイノリティとほぼ同義で用いられることもあるが、セクシュアル・マイノリティと呼ばれる人々は、LGBT だけではない。事実、セクシュアル・マイノリティを指すために、上記 4 つ以外のクエスチョニングや、インターセックスといった人の存在を含めてセクシュアル・マイノリティを示すために LGBTQ、LGBTI、LGBTQ+ といった呼称が使われる。

ることから、トランスジェンダー・トランスセクシュアル当事者は、既存のカテゴリーとのズレに親和性を抱いているといえる。

こうした既存のカテゴリーとのズレへの重視は、トランスジェンダー当事者を対象とした他の研究にも見られるだけでなく（荘島、2000；枝川・辻川、2011）、レズビアン女性やゲイ男性においても同様に指摘される（Jowett, 2010；草柳、2001）。例えば、草柳（2001）は異性愛でない女性を対象とした調査の自由記述から、彼女らの自己イメージを分析している。調査では性指向と経験するジェンダーについて各 5 つの選択肢が提示されたが「これにも、選択肢が足りないという声や、“ムリヤリ言えば”というような留保の言葉、さらに独自のカテゴリーが挙げられている」と述べ、非異性愛女性たちに『私』が 1 つの既成のカテゴリーに還元されることへの違和感』があると指摘する（草柳、2001）。

これらの研究からは、セクシュアル・マイノリティ当事者が、自己イメージを語るうえで、一面的なカテゴリーと、自分自身のありかたとのズレの認識をもとに“私は私”という独自性を重視しているといえる。さらにいえば、セクシュアル・マイノリティ当事者にとって重要なことは、“反対の性”や同性愛者としてのアイデンティティといった、あるカテゴリーに同一化しそのアイデンティティを形成することではなく、むしろ既存のカテゴリーに対する違和感に独自性を見出すことであると推測される。セクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージでは、セクシュアル・マイノリティとしてのアイデンティティという所属意識だけでなく、所属することへの違和感が重視されていると考えられる。

4. 所属意識と違和感の相互作用としてのジェンダー・アイデンティティ

第 2 節においては、ジェンダー・アイデンティティに関する研究を概観し、ジェンダー・アイデンティティという用語が、性役割の志向性、性対象選択、性別に関する所属意識などの、さまざまな次元で使用されていることを確認した。第 1 節で述べたように、トランスジェンダーのような性別違和に苦しむ当事者だけでなく、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルという性指向におけるマイノリティの当事者もまた、自己のジェンダーに関して深刻に悩み、自身が“女であること”や“男であること”に関して揺さぶられ、考えさせられる体験をしやすく、女性または男性としての所属意識も揺らぎやすいと考えられる。

それゆえ、第 3 節でみたように、同性愛者としてのアイデンティティや、トランスセクシュアルとしてのアイデンティティというセクシュアル・マイノリティとしてのアイデンティティを持つこと、すなわち特定のマイノリティ・グループへの所属意識が、セクシュアル・マイノリティにとって重要となる。しかし同時に、セクシュアル・マイノリティ当事者たちは、あるカテゴリーに所属することへの違和感もまた重視する。石井（2012）はセクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージを「カテゴリーとのずれを含む自己像」と端的に述べている。「カテゴリー」と、そのカテゴリーとの「ズレ」との両方が、セクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージにとって重要であるといえる。その意味で、セクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・アイデンティティは、単に所属意識として捉えるよりも、所属しているカテゴリーとのズレとが影響しあって変動し続けるプロセスであると考えの方が妥当だと考えられる。

以上を踏まえると、中村（2006）の表現に倣い、セクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・

アイデンティティは以下のように定義できる。すなわち、セクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・アイデンティティとは、自身の身体的特徴や性役割への志向性、性指向が、自己のアイデンティティ形成とどのように関わるかということについての主観的な解釈であり、あるカテゴリーへの所属意識と、カテゴリーに対する違和感との相互作用によって更新され続ける。

こうした動的なジェンダー・アイデンティティを考える理論的枠組みとして、Stephen, Fraser & Marcia (1992) によるアイデンティティの MAMA サイクルモデルが参考になると考えられる。このモデルは、アイデンティティの様相を「危機 crisis」と「自己投入 commitment」の組合せによって4つのステータス(アイデンティティ達成、モラトリウム、アイデンティティ拡散、早期完了)に類型化する Marcia (1966) のアイデンティティ・ステータス理論を発展させたものである。MAMA サイクルのモデルでは、アイデンティティ・ステータスの移行は、アイデンティティの探究に特徴づけられる「モラトリウム moratorium」と、あるアイデンティティへの自己投入に特徴づけられる「アイデンティティ達成 achievement」とが連続するプロセスとして説明される。MAMA サイクルについて、Stephen, et al.(1992) は「意味深かった自己投入が満足のいかないものになると、個人の自己イメージや定義はもはや新しく生じる考えや感情、価値観に合ったものではなくなる。外的なライフイベントが古い様式への試練となるのである。その個人に受容性があれば、当人はモラトリウムへと再び参入し、サイクルが再び訪れる。それゆえ、アイデンティティ形成プロセスは、線形よりもむしろ螺旋形に描かれるのがよいかもしれない」と述べている。あるアイデンティティに一旦自己投入しても、内的・外的な変化によって、そのアイデンティティが、自身の「考えや感情、価値観」と合わなくなることがある。こうした自己イメージの固定化と、そこからの脱却が「螺旋型」として描かれていると捉えられる。

この過程は、第3節でみたセクシュアル・マイノリティ当事者がカテゴリーへの違和感に独自性を見出す過程と類似している。アイデンティティへの自己投入はカテゴリーへの所属意識に、その自己イメージと自身の考えや感情、価値観とのズレはカテゴリーに対する違和感に、それぞれ相当するものと考ええるならば、カテゴリーへの所属意識と、違和感によるカテゴリーからの脱却が螺旋形を描いて個人のジェンダー・アイデンティティを形成していく、というモデルを想定できるのではないだろうか。このモデルをもとに、アイデンティティ・ステータスの研究手法を応用することで、小此木・及川 (1981) や中村 (2006) が提唱した動的なジェンダー・アイデンティティについて、実証的に検討することも可能になるかもしれない。

5. まとめと今後の課題

本論文では、ジェンダー心理学と生物学・医学領域におけるジェンダー・アイデンティティ研究と、またセクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージについての研究の概観を行い、セクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・アイデンティティを捉えるための理論的枠組みについて考察した。ジェンダー・アイデンティティの概念は、研究者によって、あるいは領域によって意味する内容が異なっていたが、それらの相違を超越しようとする立場から、ジェンダー・アイデンティティは性役割への志向性や所属意識といった様々な要素を統合した主観的解釈であり、変化する動的なプロセスと捉える視点が提示されている。セクシュアル・マイノリティ当事者の自己イメージもまた、動的なものといえ

る。すなわち、あるカテゴリーへの所属意識をいかにもてるか、というセクシュアル・マイノリティとしてのアイデンティティ形成だけでなく、そのカテゴリーへの違和感に意味を見出すという、自己の独自性を強調するセクシュアル・マイノリティ当事者の在り方が指摘された。最後に、所属意識と所属するカテゴリーとの違和感の両者がセクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・アイデンティティを形成し、更新し続けると考え、MAMA モデルと対応させて検証しうる可能性を示した。

トランスセクシュアルやトランスジェンダー、あるいはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルも含めたセクシュアル・マイノリティ当事者においては、ジェンダーへの非同調性 (gender nonconformity) と呼ばれる、出生時のジェンダーと異なるジェンダーに典型的な興味関心や行動を示すことが指摘される (Bailey & Zucker, 1995; Coleman et al., 2007)。ジェンダーへの非同調性は、セクシュアル・マイノリティ当事者のジェンダー・アイデンティティ形成のプロセスと関連していると推測されるが、本論文ではセクシュアル・マイノリティ当事者の性役割とジェンダー・アイデンティティの関連についてはほとんど扱うことができなかった。この点については改めて検討が必要だろう。また、最後に提示した MAMA サイクルはアイデンティティ・ステータスの研究手法を応用して提唱されたモデルであり、価値観や職業といった観点がアイデンティティ形成を重視している点で、カテゴリーへの所属意識とは異なる部分も多いだろう。その意味で、ジェンダー・アイデンティティのモデルとして適用可能か、研究手法としてどの程度適用可能か、どのような工夫が必要かといった点について、より丁寧に検討せねばならない。こうした課題はあるものの、性を表すあるカテゴリーへの所属意識と、カテゴリーへの違和感という視点からジェンダー・アイデンティティ形成プロセスを捉えることで、性別違和感やジェンダーへの非同調性、ジェンダーにまつわる違和感 (Drescher, 1998) のような、所属意識や性指向にまつわる苦悩や、ホモフォビアやトランスフォビアの内在化といった観点からだけではとらえきれない、セクシュアル・マイノリティ当事者の“生きづらさ”を捉えていくことに繋がると考えられる。

文 献

- 青木紀久代 (1991). 女子中学生における性同一性の形成 心理学研究, 62, 102-105.
- 東 清和 (2002). 性同一性カテゴリーと自尊感情との関連性 ―伝統一致モデルの検証― 早稲田大学教育学部, 36, 1-11.
- Bailey & Zucker (1995). Childhood Sex-Typed Behavior and Sexual Orientation: A Conceptual Analysis and Quantitative Review. *Developmental Psychology*, 31, 43-55.
- Bem, S. L. (1974). The Measurement of Psychological Androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Cass, V. C. (1984). Homosexual identity formation: Testing a theoretical model. *Journal of sex research*, 20, 143-167.
- Coleman, E., Bockting, W., Botzer, M., Cohen-Kettenis, P., DeCuypere, G., Feldman, J., ... & Monstrey, S. (2012). Standards of care for the health of transsexual, transgender, and gender-nonconforming people, version 7. *International journal of transgenderism*, 13(4), 165-232.
- Connell, R. W. (1992). A Very Straight Gay: Masculinity, Homosexual Experience, and the Dynamics of Gender. *American Sociological Review*, 57, 735-751.
- 土肥伊都子 (1999). ジェンダーに関する自己概念の研究―男性性・女性性の規定因とその機能―. 多賀出版.
- Drass, K.A. (1986). The Effect of Gender Identity on Conversion. *Social Psychology Quarterly*, 49, 294-301.
- Drescher, J. (1998). Psychoanalytic therapy and the gay man. New York: Routledge.
- 枝川京子・辻川昌登 (2011). LGBT 当事者の理解にナラティヴ生成が果たす役割. 心理臨床学研究, 29, 85-96.
- Ehhardt, A.A. (1985). Gender Differences: A Biosocial Perspective. In Sonderegger, T.B. (Ed.) *Psychology and Gender (Nebraska Symposium on Motivation Vol.32)*. (pp.37-57). University of Nebraska Press.
- Eliason, M.J. & Schope, R. (2007). Shifting Sands or Solid Foundation?: Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Identity

Formation.

- In Meyer, I.H. & Northridge, M.E. (Eds.) *The Health of Sexual Minorities: Public Health Perspectives on Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Populations*(pp.3-26). New York, NY: Springer Science & Business Media.
- 福富 護 (2006). ジェンダー心理学の現状と課題 福富 護 (編) 朝倉心理学講座 14 ジェンダー心理学 朝倉書店.
- 播磨俊子 (2006). 性・ジェンダー 伊藤美奈子(編) 朝倉心理学講座 16 思春期・青年期臨床心理学 朝倉書店.
- 石田英子 (1994). ジェンダー・スキーマの認知創刊指標における妥当性の検証. 心理学研究, 64, 417-425.
- 石井由香里 (2012). カテゴリーとのずれを含む自己像—性別に違和感を覚える人々の語りを事例として—. 社会学評論, 63, 106-123.
- 石丸径一郎 (2001). マイノリティ・グループ・アイデンティティ—人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか—. 東京大学大学院教育学部研究科紀要, 41, 283-290.
- 伊藤裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情、身体満足度との関連から—. 教育心理学研究, 49, 458-468.
- Jowett, A. (2010). 'Just a Regular Guy': A Discursive Analysis of Gay Masculinity. *Psychology of Sexualities Review*, 1, 19-28.
- 草柳千早 (2000). 現代社会における「生きづらさ」と「アイデンティティ」—生き方の多様性と社会—. 三田社会学, 6, 51-65.
- Marcia, J.E. (1966). Development and Validation of Ego-Identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Money, J.K., Hampson, J.G. & Hampson, J.L. (1955). An Examination of Some Basic Sexual Concepts: The Evidence of Human Hermaphroditism. *Johns Hopkins Bulletin*, 97, 301-319.
- 中村美亜 (2006). 新しいジェンダー・アイデンティティ理論の構築に向けて —生物・医学とジェンダー学の課題— *Gender and Sexuality: Journal of the Center for Gender Studies, ICU*, 2, 3-24.
- 小倉千加子 (2001). セクシュアリティの心理学. 有斐閣選書.
- 小此木啓吾・及川 卓 (1981). 性同一性障害 懸田克躬 (編) 現代精神医学大系第8巻人格障害・性的異常 (pp.233-273) 中山書店.
- O'Heron, C. & Orlofsky, J. (1990). Stereotypic and Nonstereotypic sex role trait and Behavior Orientations, Gender Identity, and Psychological Adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 134-143.
- 及川 卓 (2016). ジェンダーとセックス —精神療法とカウンセリングの現場から—. 弘文堂.
- 佐々木掌子・尾崎幸謙 (2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成. パーソナリティ研究, 15, 251-265.
- 荘島幸子 (2008). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程 —自らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討—. パーソナリティ研究, 16, 265-278.
- Spence, J., Helmreich, R. & Stapp, J. (1975). Ratings of Self and Peers on Sex Role Attributes and Their Relation to Self-Esteem and Conceptions of Masculinity and Femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- Stephenf J., Fraser, E. & Marcia, J.E. (1992). Moratorium-Achievement (Mama) Cycles in Lifespan Identity Development: Value Orientation and Reasoning System Correlates. *Journal of Adolescence*, 15, 283-300.
- Stoller, R. J. (1964). "A contribution to the study of gender identity". *International Journal of Psychoanalysis*, 45, 220-226.
- Stoller, R. J. (1968). *Sex and Gender*. Science House, New York.
- Swaab, D. F. (2004). "Sexual Differentiation of the Human Brain: Relevance for Gender Identity, Ttranssexualism and Sexual Orientation". *Gynecological Endocrinology*, 19, 301-312.
- 谷 冬彦 (2001)青年期における同一性の感覚の構造 —多次元自我同一性尺度(MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- Troiden, R. R. (1988). Homosexual identity development. *Journal of Adolescent Health Care*, 9, 105-113.